

學會の動き

日本財政學會第九回總會

第九回總會は昭和二十七年一〇月一〇、一一の兩日にわたり、早稻田大學で開かれ、出席會員約五〇、すこぶる盛會だつた。まづ當日の日程から記録しよう。

第一日(一〇月一〇日)

- 研究報告
 - 日本財政史の一齣
 - ワイリアム・ベティの租稅論
 - 公債の負擔能力と經濟成長率
 - 公開講演
 - 減稅と資本蓄積
 - 租稅經濟と資本主義
- 第二日(一〇月一日)
 - 研究報告
 - 農村財政の實態
 - 地方財政平衡交付金制度について

- 大藏省財政 史編集室
- 一橋大學 大川政三
- 福岡商大 石村善兵衛
- 武蔵大學 (東京大學) 鈴木武雄
- 一橋大學 井藤半彌
- 農林省農業 恒松制治
- 總合研究所 奥野誠亮
- 自治廳財政 部

地方稅制の現状と問題點

均衡豫算の乘數效果に關する理論の現實的妥當性について

共通論題(シャウプ勸告の再檢討)

國稅の部

地方稅の部

以下主な論點を摘録しよう。

西村氏は昭和九一十二年頃の財政の實態(特に軍備費と赤字)を國民所得、産業構造、貿易などと關係づけて考察し、最近におけるわが國財政が當時とかなり類似の傾向をたどりつゝあることを示唆せられた。大川氏はベティの租稅論をその時代的背景、とくにイギリス財政史の面から説明し、ベティの歴史的意義をたしかめようとせられた。重商主義との關係、消費稅謳歌論と消費との關係などにつき、佐藤進氏、井手文雄氏、米原七之助氏などから質問があつた。石村氏は最近のケインジヤンの均衡豫算論に對し多數の疑問を提起せられた。しかし同氏は、均衡豫算は果して可能かといふ政策の問題として取り上げため、宇田川璋仁、遠藤湘吉、林榮夫、山口忠夫等多くの會員からかなりはげしい質問を浴びたやうである。

公開講演はこの學會でははじめての試みだつた。大隈講堂は學生で埋まつた。時子山常三郎教授の挨拶についで鈴木教授立ち、減稅による資本蓄積に疑問をなげかけ、國家資金による蓄積の必要を示唆された。井藤教授は租稅經濟と資本主義の密

- 地方財政 審議會 荻田保
- 慶應大學 高木壽一

- 慶應大學 永田清
- 座長 京都大學 汐見三郎

接不可分の論理關係を諧謔を交へて論じ、ソ聯における取引税等が官業収入にほかならぬことを説かれた。

第二日に入り、恒松氏は信州の或る富裕村と貧弱村とを對象とする綿密な實態調査にもとづき、農村財政の民主化・獨立化がいかに複雑な問題を内包するかを教へられた。研究方法につき島恭彦教授などから質問があつた。次に奥野氏も地方財政平衡交付金がシャウプの意圖に反し算定基準、配分方法・國家豫算との關係などにつき多くの問題を藏することを説明せられ、同じく荻田氏は、地方税について現状の不満足な所以を詳細な資料によつて報告せられた。荻田・奥野の兩氏は午後、「共通論題討論」の際、地方財政の當局者として質疑に答へ、會員の意見に耳をかたむけた。

報告者高木教授は、増税によるマイナス乗數効果が、時のズレのために経費支出のプラス効果によつて相殺されるには相當の期間を必要とすることを説明し、均衡豫算の乗數効果に對し否定的な結論を與へられた。これに對しては、主として林教授より異論が呈せられたが、時間の關係で満足な質疑應答が行はれ得なかつたのは残念である。

共通論題につき出席全會員の討論といふ形式もこの學會ではじめての試みだつた。國税については永田教授が座長とな

學會の動き

る。平田敬一郎氏（主税局長）が招かれてシャウプ税制の現状と問題點を指摘した。討論はこれを手がかりとして進められた。阿部賢一博士が資本蓄積よりも民生の安定を第一にすべきであるといふ意見をのべられた。その他にも注目すべき意見の開陳があつたのであるが、しかし概していへば、討論といふよりは局長に對する質疑（特に愛國國債について）に傾くきらひがつよかつた。地方税については汐見教授が座長、荻田・奥野兩氏が聴き役で討論が進められたが、この方は野津高次郎氏、藤田武夫教授、岡野鑑記教授、山口忠夫教授などから相當つゝこんな積極的な意見がのべられた。要するに地方税はこのまゝでは困るのである。

懇親會の席上でもなかなか實のある話や意見が出た。トロントの全米租税協會大會に出席された汐見教授から、學界・實業界の見聞談があつたが、井藤半彌教授の海外の財政學關係の學會の紹介や、林容吉教授のアメリカ留學中の經驗談も意義深いものであつた。學會や新刊書や雑誌についても質疑應答がかなり遅くまで續けられた。主催者側の接待の苦心がかういふところにも効果を現はしたやうである。（木村元一）

（一九五二・一〇・三一）